

日本アビリティーズ協会のこと

4カ月前、私にとっては最初となった1月のテープで、自己紹介をさせていただいた際に、次回から世界各地を訪問した時のエピソードを紹介していきたい旨のお話をしました。ついては、そこに入る前に、もう一つ、私が関係している障害者団体のことについて先にお話をさせていただきたいと思います。それは「日本アビリティーズ協会」のことです。たぶん、テープを聴いてくださっている皆様の中にもこの名前を聞いたことがあるか、実際に関係している方がいらっしゃるかもしれません。

「アビリティーズ」とは、英語で「能力」のこと。仮に障害者であっても、人間として生きる力、仕事をしていく力を持っていることから、その能力を生かす場を、チャンスを与えてほしい、との願いから作られた協会です。

会長の伊東さんは、自らがポリオ障害で右足が悪く、高校の卒業時、ほとんどの会社が就職試験の機会すら与えてくれなかった、といいます。幸い、その中で一つだけ理解ある会社が採用をしてくれ働けることになった伊東さんは、夕方から早稲田のキャンパスに通い向学の心を燃やしていました。

41年前、大学卒業と同時に「日本アビリティーズ協会」を設立、同時にその理念を反映した企業として、障害のある6人で小規模のオフセット印刷会社を起業したのです。

不断の努力と新分野の開拓で会社は徐々に伸び、今「アビリティーズ・ケアネット」と社名も改め、福祉用具の開発や福祉施設を運営し、現在1000人の社員、超重度の障害のある人も働けるモデル企業として発展しています。特筆すべきは、こうした会社でありながら、企業利益をあげ、会社も、働いている障害者も税金を納め、株主にも配当していることです。また「旅はリハビリに一番」と障害者が海外旅行もできるような企画も組んできました。そして昨年はアビリティーズ海外留学・奨学基金を創設したのです。

「心身に障害のある人を世界で活躍するリーダーに育てたい」——なんとスケールの大きなヒューマニズムにあふれた事業でしょうか。すでにイギリス・オックスフォード大学の総長、副総長も来日して、留学の受け入れ提携の第一歩もできたといいます。

昨年の10月、東京のサントリーホールでその創設記念コンサートが開催されました。“愛と絆”をテーマの日・韓・中、三国の演奏家による舞台は、満員で温かなヒューマニティにあふれていました。私も韓国からの留学生2人と交換教授を案内したところ、3人とも大変に感動していました。「何よりも趣旨がスバラシイ！」と。

ここまで発展してきた日本アビリティーズの創立の発端を伊東さんは次のように綴っています。——大学卒業の前年、ある雑誌に私の短い投稿が掲載された。自分の体験から「身体障害者であっても、もっと積極的に自分の人生を展開していこう。やればできる」という内容の、ほんの400字くらいの短い文章だった。すると雑誌が発行されて10日足らずの間に、私は、全国から5、60通もの手紙の波におそわれることになった。

ほとんどが同感、共鳴の内容であった。しかし、そのどれもが自分の力でやりたくてもできない人たち。自信を持つことができず、苦痛の中に日々を送っている人たちだった。

連日、送られてくるそれらの手紙に、私はこうした人々が働ける場はないかとさまざまに模索、いくつかの授産施設にも行ってみた。でもそれらはどうしても私の感覚とは合わなかった。私の

考えていたのはもっと企業性の高いものであった。収容されるのではなく、勤務するのである。ふつうの社会人として、仕事を味わい、家庭も持つことである。

明確な方法を得られないでいたとき、ニューヨークのアビリティーズ社を知った。国内で得られる情報をできるだけ集めた。

あゝ そのすばらしさ。私の求めているそのものが、そこにあった。私の願いに応じて、アビリティーズ社のビスカルディ氏から分厚い資料とともに、メッセージが寄せられてきた。アメリカ人にできて、日本人にできないはずはない。その頃、私にはこのための数人の同志ができていた。次第に日本アビリティーズ創立の心づもりが固まってきた。

1966年2月初め、大学の最後の試験が終了した翌日から本格的な準備が開始された。同志の糾合、仕事は何をやったらよいか？ 資本金は？ 得意先は？ 機械は？ 資本金は身障者を含め約20人が、小は千円からという資金をあわせ150万円でスタートすることになった。

1966年、印刷業を営む会社を設立、機械も入り始めた。しかし、仕事はいっこうになかった。連日、私は訪問を続けたが、最初の1カ月の売り上げはなんとたったの16,000円であった。技術を持たない従業員たちは、ただ訓練をやるだけであった。工場準備に要したいろいろの経費を合わせて、最初の1カ月間で50万円もの赤字が出てしまった。申し出のあった好意や、応援を甘く見ていたようだった。

4カ月目頃からやっと100万円くらいの注文が取れるようにはなったが、技術の拙劣さは、業績を悪化するばかりだった。注文は増えても力があまりないため、徹夜が続く。工場も家主の理解が得られず1年間に4箇所を転々とした。惨めな思いがときどき私の胸をよぎった。1年後、会社の借金は400万円を超えていた。

しかし、1年半を経過した頃から目に見えて情勢が変わっていった。とにかく、従業員たちの気迫がすごかった。「自分の会社」との意識が満ちていた。3年を経過したとき、会社の財務状態はやっと正常に回転するようになり、欠損を一掃して純利益を計上し、1割の配当を開始した。会社の売り上げも年々増え、1億円を超えていった。従業員たちの給料も次第に昇給し、完全に納税者の立場になった。

我々が創立した頃、株式会社で身障者の社会復帰を試みることに、経験深い社会事業家の多くは注目しながらも鋭い批判を浴びせていた。

身障者は弱いものだから保障されなければやっていけないというのだ。たしかに庇護されなければ生きていけない重度の人たちも多い。その人たちには当然、十分な保障が必要である。しかし、やればできるのに、やろうとしない身障者、機会を与えればすばらしい力を発揮する可能性を持っているのに、機会を与えられない人が、非常に多いのである。我々は、このような人に呼びかけ、一度や二度の失敗でおびえるのではなく、共に力を合わせて挑戦することを試みたいのである――

伊東さんが原点としてきた、アビリティーズの綱領は次のように訴えています。

――わたしは、平凡な人間でありたくない。非凡な人間としてできれば、“保障”よりも“チャンス”を選ぶこと・・・これこそわたしの願いである。わたしは、国家に養われ、卑屈で怠惰な人生を送ることに満足できない。わたしは、夢をえがき、計算された冒険の道を求め、建設しつづける。たとえ、それが成功しようとも、失敗しようとも。わたしは、すばらしい人生の刺激を、いくばくの施しのために放棄することなどしない。わたしは保証された生き方よりも、つねに挑戦する人生を選ぶ。

それはユートピアのような日々ではなく、スリルに満ちた世界である。わたしは、決して、恩

恵のために自由を、慈善のために尊厳を捨てることはしない。いかなる権力者の前でも畏怖しないし、また、いかなる恐怖に対しても恐れることはない。姿勢を正し、誇らかに、なにごとく恐れず、自らの意思で決断し、行動する。自分で創造していくことを大切に考え、世間に向かってこう宣言したい。「これが、わたしの成し遂げたことだ」——と。

われら数百万の障害者のために、あなたとわたしのために、この綱領は名誉ある日本人としての道を示すものである。

一方的な同情や慈善よりも、挑戦できるチャンスを提供することの大切さ。「五体不満足」の著書で知られた乙武さんをはじめ、障害者でも健常者以上に第一線でがんばっている人もいます。大事なことはその心の持ち方、生きる姿勢なのでしょう。

実は、伊東会長とは大学時代、クラスが一緒にその挑戦の姿勢にはいつも刺激を受けてきました。また小額ながら会社創立のときの最初の株主として出資もした一人でした。

理想と勇気あるところ道が開け、ハンデがあるほどに向上への意欲を燃やす。夢に向かって挑戦する身障者の皆さんからは、こちらが学び励まされることも多いのです。